

魯迅「影的告別」に去来する周作人の影

秋吉, 收

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門 : 准教授 : 国際文化学

<https://doi.org/10.15017/25666>

出版情報 : 言語文化論究. 29, pp.91-105, 2012-10-24. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :



魯迅「影的告別」に去来する周作人の影

秋 吉 收

序

魯迅文学芸術の粹とも評される散文詩集『野草』に関する膨大な研究の中に、弟周作人の関与、影響を論じた専論は管見の限り見当たらない。詩作は極めて少なく、散文家、エッセイストとして著名な周作人と“詩”が容易には結びつかないことがその最大の原因であろうが、1923年に突如訪れた兄弟二人の決定的な断絶の翌年から書き継がれた魯迅の『野草』が、一層、周作人から遠いものと意識されるのも当然の成り行きであろうか。

また内容的にも、魯迅の『野草』の深淵に周作人は到底及び得ないとの研究者の認識があるようだ。例えば『野草』のモチーフとなっている“死”に対する意識について、銭理群『周作人論』（1991年）は、周作人の“死”への意識は、そこから逃避して享楽を愉しむものであり、魯迅には遠く及ばないと断ずる。¹

兄弟二人の関係については、未解決の問題が少なからず残されているようだ。竹内好はその著『魯迅』「伝記に関する疑問」に次のように書きつけた。

彼（魯迅）と周作人とは、共同の著書を出したり著書に名を貸したりして、世間並の兄弟より遙かに近接した関係にあっただけに、死ぬまで解けぬ不和を結ぶに到った事情には、やはり普通の肉親間の感情よりは深いわだかまりがあったのではないだろうか。魯迅と周作人とは、表現は極端にちがうが、ある意味ではお互が相手を影にもつほど本質的に類似している。思想的にそうであるばかりでなく、氣質的にもそうである。²（下線等は引用者による。以下同じ。）

竹内の盟友、武田泰淳も「周作人と日本文藝」（1944年）の中で次のように述べている。

この二人の兄弟の態度は、正反対であつたの如く考へられがちである。しかしそれは陰陽両性ともいふべき身の處し方の相違だけで、二人の裏を見、表をながめて行くうちに共通する精神のしこりに到達し得る、さうした両面なのである。³

小論では、魯迅の散文詩集『野草』、その中でも特に難解かつ重要な作品と評される「影的告別」を手がかりに二人の関係について新たな視点から考察してみたい。「影的告別」が書かれた1924年はいわゆる五四退潮期で、“いつも「暗黒と虚無」のみが「实在」であると感じ、しかも、どうしてもそれらに対して絶望的な抗戦をやる”（『两地書・四』1925年3月）、さうした魯迅自身が深く投入されている。この詩は、1924年12月『語絲』週刊第4期に掲載された。

影の告別

人睡到不知道時候的時候，就會有影來告別，說出那些話——

有我所不樂意的在天堂裏，我不願去；有我所不樂意的在地獄裏，我不願去；有我所不樂意的在你們將來的黃金世界裏，我不願去。

然而你就是我所不樂意的，朋友，我不想跟隨你了，我不願住。

我不願意！

嗚呼嗚呼，我不願意，我不如徬徨於無地。

我不過一個影，要別你而沉沒在黑暗裏了。然而黑暗又會吞併我，然而光明又會使我消失。

然而我不願意徬徨於明暗之間，我不如在黑暗裏沉沒。

然而我終於徬徨於明暗之間，我不知道是黃昏還是黎明。我姑且舉灰黑的手裝作喝乾一卮酒，我將在不知時候的時候獨自遠行。

嗚呼嗚呼，倘若黃昏，黑夜自然會來沉沒我，否則我要被白天消失，如果現是黎明。

朋友，時候近了。

我將向黑暗裏徬徨於無地。

你還想我的贈品。我能獻你甚麼呢？無已，則仍是黑暗和虛空而已。但是，我願意只是黑暗，或者會消失於你的白天；我願意只是虛空，絕不佔你的心地。

我願意這樣，朋友——

我獨自遠行，不但沒有你，並且再沒有別的影在黑暗裏。只有我被黑暗沉沒，那世界全屬於我自己。

一九二四年九月二十四日。

影のいとまごい（拙訳）

ひとが時を覚えぬほど眠りに墜ちたとき、きまって影がやって来ていとまを乞い、こんな話をする——

わたしの意に添わぬものが天国にあるのなら、わたしは行きたくない。わたしの意に添わぬものが地獄にあるのなら、わたしは行きたくない。わたしの意に添わぬものがきみたちの未来の黄金世界にあるのなら、わたしは行きたくない。

だが、きみこそがすなわちわたしの意に添わぬものだ。友よ、わたしはもはやきみについて行きたくない、わたしは留まりたくない。

わたしは嫌だ！

ああ、ああ、わたしは嫌だ、わたしは道なきところを彷徨するほうがよい。

わたしはひとつの影に過ぎぬ、きみと別れて暗黒のなかに沈むのだ。だが暗黒がまたもわたしを呑み込むだろう、だが光明がまたもわたしを消し去るだろう。

だが、わたしは明と暗の狭間を彷徨したくない、わたしは暗黒のなかに沈むほうがよい。

だが、わたしは結局は明と暗の狭間を彷徨する、わたしには黄昏であるのかそれとも黎明であるのか解らぬ。わたしはしばらく薄黒い手を挙げ一杯の酒を飲み乾すふりをして、時を覚えぬときに独りで遠くへ行くのだ。

ああ、ああ、もしも黄昏ならば、暗夜が当然やって来てわたしを沈めるだろう、さもなければわたしは白日によって消されてしまうだろう、もしも現在が黎明であるならば。

友よ、時は近づいた。

わたしは暗黒のなかへ向け道なきところを彷徨するのだ。

きみはなおわたしの贈り物を願う。わたしがきみに何を献げよう？ 如何ともしがたい、ただやはり暗黒と虚無のみだ。しかし、わたしはただ暗黒だけが、あるいはきみの白日に消されてしまうことを願う。わたしはただ虚無だけが、けっしてきみの心を占有しないことを願う。

わたしはかく願う、友よ——

わたしは独りで遠くへ行く、きみがいないだけでなく、さらに他の影も暗黒のなかにはいない。わたしだけが暗黒に沈められ、かの世界はすべてわたし自身に属するのだ。

1924年9月24日。

—

1920年10月2日付北京『晨报副刊』（『晨报』第七版文芸欄）に、周作人（署名：仲密）訳、「散文詩二篇」が掲載されているが、その第一篇「你爲甚麼愛我」は、次のような作品である（魯迅『野草』「影的告別」との比較対照作品については、基本的に原文を挙げる）。

仲密（周作人）訳「散文詩二篇」

一 你爲甚麼愛我

拉忒伐亞庫拉台爾原作

申沙耶夫 譯本

……當你正在夢想的時候、獨自來到你的耳邊私語麼？

我一點都沒有、也沒有花、也沒有愛撫、也沒有接吻。……沒有、我是一無所有！

……我所愛的是暗黒與孤獨。我願永久的遊行、……、我會在那裏朽腐了、孤獨而且被忘却。……

你爲甚麼愛我、愛生病的人呢？你可以去、——那裏的世界都開着花、那裏的人對於生活都滿足、又渴望着愛、摘下花來、唱着歌、——在那裏你可以得到你的春天。

◇譯者序

這兩篇詩、是從愛斯普列忒編世界語的「萬國小文選」⁴裏譯出的。我的世界語還是初學、恐不免有錯誤的地方、要請識者的指教。原本並不說是詩、但我看他的性質是散文詩、所以這樣標題了。

原詩は、バルト三国の一つラトヴィア人の作品で、周作人が訳者附記で説明するように、世界語（エスペラント）のアンソロジーから翻訳されたようだ。内容は、戦争に赴く男の、愛する女性に向けた悲しい告別の歌であろうか。彼は告げる「僕には何もない。暗黒と孤独を愛し、永久にさまよい、朽ち果てる（“朽腐”）のみ。」⁵と。魯迅の「影的告別」と比較してみると、“夢の中での対話”という設定自体、“暗黒（と孤独）のあわいをさまよう”主人公の存在、“私には与えられる何物もない”、だが結末では“不思議な安寧を得て終わる”等、類似点が見られる。

さらに、魯迅の『野草』執筆から四年遡る、1920年という極めて早い時期に、敢えて“散文詩”との標題を冠した周作人の、散文詩に対する明確な強い意識は注目される。散文詩に対する中国の文壇の対応は、1922、23年に至って文学研究会を中心とした「散文詩論争」が繰り広げられるなど、従来の格律詩の旧套を破るものとして重視されることになるが、1920年の段階では、その存在すらまだ殆ど認識されていなかった。だが魯迅は『野草』の習作と位置付けられる「自言自语（散文詩7篇）」（1918）の執筆が物語るように、周作人同様、やはり極めて早い時期から散文詩に注目していた。両者における“散文詩”という詩形式の相同は看過できない要素である。また、時を同じくして、この周作人のエスペラント訳詩が掲載されたのと同じ『晨报副刊』紙上にツルゲーネフ「散文詩五十篇」が連載されていた（1920年6月12日～10月9日）ことも見逃せない。このツルゲーネフ散文詩を始めとする『晨报副刊』掲載作品群が、後の『野草』執筆において重要な位置を占めていたこと、以前の拙稿で明らかにした通りである。⁶

魯迅と周作人は当時北京で同居し、ともに文学活動に熱心に取り組んでいたことを考えあわせるに、二人がともに早期から散文詩へ注目していたことも偶然の一致ではなく、二人共同で進められた研究成果と呼ぶべきかも知れない。では、なぜラトヴィアの文学を選んだのか。小国家ラトヴィアについて、鈴木徹氏『バルト三国史』（2000）は、「第一章 被支配民族の歴史」の中で、次のように述べる。

ドイツ人騎士はバルトドイツ貴族として支配層を形成する一方で、バルト原住民族の統合が進み、ラトヴィア人やエストニア人は被支配層として農民階級を形成することになった。・・・実社会では農奴制の導入によってドイツ貴族がエストニア人、ラトヴィア人を農奴として支配する体制が確立した。そしてこの支配関係は、第一次世界大戦後エストニアとラトヴィアの両国が独立するまで、実に四〇〇年近く継続することになった。（中略）バルト三国がロシアと欧州の狭間に位置するという地政的条件は、いつの時代も変わらない。ロシアと欧州が対立する歴史において、この地域的位置が、バルト三国に大きな災禍と苦難を強いていた⁷

志摩園子氏（2004）も、次のように指摘している。

第一次世界大戦中、バルト海東南岸の諸民族の中で、地域内外の諸勢力にもっとも翻弄されたのがラトヴィア人かもしれない。ラトヴィア人の居住区域がドイツとロシア、そしてポリシェヴィキの最前線であったからである。⁸

周辺の強国に翻弄される“被圧迫”“被支配”民族。それはまさに当時の中国の状況、魯迅や周作人を始めとする知識人たちの危機意識にぴたりと重なるものであった。そうした被圧迫民族の文学を集めて『域外小説集』（1909初版）として出版したことは、魯迅周作人兄弟の提出した一つの解答であった。周作人によるラトヴィア詩の翻訳も、そうした活動の一環として位置付けることができ

よう。そして当時、こうした小国の文学を紹介する上で有効に機能したのが、世界に広がるエスペラント運動である。中国におけるエスペラント普及の運動には、特に周作人が熱心に取り組んだが、魯迅もシンパの役回りながら積極的に関与している。以下、二人の“エスペラント（世界語⁹）”への取り組みをひもとくことによって、二人の意識に迫りたい。

侯志平著『世界語運動在中国』（1985年、中国世界語出版社刊）は、中国におけるエスペラント活動の歴史を端的かつ詳細に辿ることのできる労作であるが、まずはそこに付された「中国世界語運動年表」によって、周作人と魯迅のエスペラントとの関わりを概観しよう。

（1908年）・・4月、劉師培、何震（劉師培妻）、張継が無政府主義の宣伝誌『衡報』（Egaleco）を日本で刊行し、世界各国の革命家が世界語をもって互いに気脈を通じ理解し合うための道具とすべきことを主張、『衡報』こそはアジアで最も早く世界語を提唱した雑誌であると声明した。何震は日本で『天義報』（Justeco）も主宰し、世界語に関する記事や学習材料を恒常的に掲載した。・・張継は東京『民報』社において世界語講座を開設、宋教仁、章太炎、朱執信、魯迅、周作人、湯增璧、蘇曼殊が参加した。

（1922年）北京世界語学会成立、周作人が会長に選出される

3月、エロシェンコが蔡元培の招請に応じ北京大学世界語科目講師に就任する。

『エロシェンコ童話集』が出版され、魯迅はその印税をすべて上海世界語学会に寄付した。

（1923年）蔡元培、呉稚暉、陳声樹らが北京世界語専門学校（Pekina Esperanta Kolegio）を創設、魯迅は招かれて理事に就任するとともに、同校にて『中国小説史略』を講義することを承諾、1925年3月まで従事する。

（1924年）5月、北京集成国際言語学校が世界語科目を開設。魯迅は同校にて短期ながら教鞭を執り、世界語への支持を表明した。¹⁰

日本留学時代から既にエスペラントに接していた二人は、エスペラント語講座にも出席して研鑽を積み、1920年代に至って中国国内でも運動が盛んになると、周作人が北京世界語学会会長に選出されるなど、積極的に関与していたことが垣間見られる。¹¹

魯迅は、1918年に「渡河與引路 Esperanto」と題して、次のように記している。¹²

私の考えでは、人類はどうしても一つの共通語を持つべきだろう、だから、Esperantoに賛成だ、というだけのことです。将来通用するのがEsperantoであるかどうかは、断定のしようもありません。・・・ただ現在は、このEsperantoしかないのですから、まず、このEsperantoを学ぶしかありません。（中略）しかし、私はいま一つ、意見を持っています。Esperantoを学ぶのも一つですが、Esperantoの精神を学ぶのもまた一つです。——白話文学もこれと同じです。——思想がもとのままなら、看板を換えただけの元の木阿弥です。

Esperantoの是非についての討論のさなか、『新青年』「投稿欄」に掲載される魯迅の銭玄同への手紙に引かれるこの「Esperantoの精神」とは、必ずしも先の引用にも見えるような無政府主義を指向するわけではなくて、思潮の流行にばかり汲々とする当時の知識界に向けて発せられた言葉で

あろう。魯迅らしい透徹した思惟が窺われて興味深い。そしてその思惟は周作人にも共通する。「緑洲 十二「世界語讀本」」(1923)より。

いまでは誰でも世界語の存在を知っているが、世界語にはある種の主義が含有されていることを知るものは極めて少ない。世界語は人為的な言語で、各国間の貿易に供することができるばかりでなく、それは世界主義（実現できるかどうかは別として）の生み出したものであり、この主義を離れては、世界語もまた生命のない木偶の坊に過ぎない。¹³

文学に引きつけた魯迅の言葉に比して、周作人の思想はより全般にわたった謂いに見えるが、そこに武者小路の「新しい村」運動に強い共感を表明する彼の立ち位置を確認することもできようか。世界語学会会長に任じた彼の言葉としても妥当なものであろう。いずれにしろ、エスペラントにその工具としての意義だけでなく、“主義・思想”を盛り込むことを重視する態度は二人に共通している。

さらに、魯迅がエスペラントを世界文学紹介における重要な媒体と考えていたことは、1929年7月、雑誌『奔流』月刊第2巻第3期に掲載された次の公開書簡からも窺える。¹⁴

逢漢先生

・・・訳詩ともなればいっそう困難で、全体の調子や押韻に気を配らなければならないために、どうしても原詩にある字句を削ったり増やしたりしなければなりません。エスペラントの翻訳本でもだいたいそのようになります、もしも訳したものが、やはり詩の形式であって散文でないとするれば。しかし、わたしたちは一部の名士たちが口にするのも潔しとしない東欧や北欧の文学を紹介したいと思っているのですが、原文のわかる人がほとんどいないために、しばらくは重訳を使わざるを得ないのです。とりわけ、バルカンの小国の作品の場合はそうです。本来の意図は、実のところ、ないよりはましだというにすぎず、まずは読書界に、いわゆる文学者というのは、世界には賞をもらったタゴールや美しいマンスフィールドのような人たちだけではないのだ、ということを知ってもらうところにあるのです・・・

魯迅。6月25日、上海にて。

『奔流』編集部に送られてきた読者からの手紙に、当時主編を務めていた魯迅が丁寧に応えたものである。相変わらずタゴールやマンスフィールドを取り上げて徐志摩を揶揄していることも興味深い。エスペラントを活用して、あまり知られない特に東欧や北欧の小国の文学を紹介したいという魯迅の強い意志が看取される。それは、小節の冒頭に引いた周作人の訳業の意図とまさに一致するものであった。

さて、「中国世界語運動年表」にも見えるように、魯迅と周作人のエスペラントの関わりを論ずる上で忘れてならないのは、ロシアの盲詩人エロシェンコ存在である。¹⁵日本を追放されたエロシェンコを魯迅周作人が八道湾の自宅に同居させ、魯迅は彼の作品を翻訳して中国で紹介するとともに、「あひるの喜劇」(1922年発表、『呐喊』所収)などの作品に登場させているし、周作人は北京大学でのエロシェンコ講義の通訳まで務めて援助したことは周知の事実である。すでに語られ尽くした感のあるエロシェンコの問題について、ここでは、周作人の回想および年譜からその事実を確認するに止めたい。周作人『知堂回想録』「一三六 西山養病」に、次のようにある。

・・私が西山に滞在したのはあわせて5ヶ月ほどだったが、その間病気の療養に努めながら、仕事に従事したとも言えようか。だがそれも何か重要な仕事というわけではなく、世界語を学習したり、あまり人目につかないような作品を幾つか訳したに過ぎない。後になって『小説月報』に発表した世界語から訳した小説は、つまりこの時期の成績というわけだ。しかしより重要なのは後にエロシェンコがおこなった世界語による講演の通訳を務めたことだろう。¹⁶

1921年に、肋膜炎と診断された周作人は6月2日、北京郊外西山の碧雲寺に転地療養、9月21日に帰宅する。この間、兄の魯迅が身の回りのことから読む本の世話まで親身に思い遣っており、二人の良好な関係が垣間見られるが、家族として居をともしながら、文学的活動にも手を携えて積極的に取り組んでいたのである。そしてその半年後、二人は当のエロシェンコを迎えることになる。張菊香・張鉄榮編『周作人年譜』「1922年2月24日」より。

ロシアの盲目詩人エロシェンコは鄭振鐸、耿濟之に付き添われて周家にやって来た。エロシェンコが日本から北京に来たのは、北京大学の招聘に応じ、世界語を教授するためである。蔡子民は魯迅、周作人の家でエロシェンコを世話するよう託したのだった。・・・その後の一定期間、エロシェンコが各地で講演する時には必ず世界語を用いたが、多くの場合周作人が通訳と紹介役を務めた。¹⁷

魯迅周作人兄弟のエスペラントとの関わり、散文詩への注目等に鑑みるに、本節の冒頭に引いた周作人によるエスペラント訳詩「散文詩二篇」の『晨報副刊』への掲載自体に、魯迅も関係していたのではないかと推測が成り立つかも知れない。1920年という、散文詩がまだ中国の文壇でほとんど注目されていなかった時期に、敢えて“散文詩”の題目を冠して『晨報副刊』にひっそりと発表された周作人のエスペラント訳詩。四年後に魯迅が自身初めての詩集『野草』の形式をやはり“散文詩”と定めた時、この周作人の訳詩が脳裏に去来したとしてもあながち不自然なことではあるまい。

二

周作人によるエスペラント訳詩掲載から一年後、1921年の11月21日に、同じ『晨報副刊』にフランスのボードレールの作品が掲載されている。訳者はやはり周作人、翻訳のタイトルは「散文小詩」。

法國 波特來耳 原作 仲密（周作人）譯 「散文小詩（六篇）」

一 游子

告訴我，你謎的人，你最愛誰？你的父親，你的母親，你的姊妹，你的兄弟麼？

「我沒有父親，沒有母親，沒有姊妹，也沒有兄弟。」

那麼你的朋友呢？

「你用這一個字，直到現在，在我是無意義。」

（中略）

黄金呢？

「我憎惡他如你們憎恨你們的神。」

那麼，奇異的游子，你愛什麼呢？

「我愛那雲，—— 那過去的雲，—— 那邊，—— 那神異的雲。」

二 狗與瓶

「來，我的美狗；來，汪汪，嗅這在市上優等香店裡買來的好的香水。」

(後略)

〔譯者 1921年11月13日附記。〕

ボードレール (Ch.Baudelaire 1821-1867) は1857年に詩集『悪の華』を発表し、近代文学史上に一つの新時代を創出した。彼は同時期の高踏派が採った簡潔なスタイルで、彼自身の幻滅した靈魂による真実の体験を書き綴ったが、それは現代人の新しい心情を代表するに足るものであった。彼の詩には自身の性格の陰影や、精神の苦しみ、絶望の沈痛が充満している。彼の幻影は暗く恐ろしい。その著作の大部分は若者や無知なる者が読むに適さないが、賢明なる読者はこの詩から稀なる真実の力を得ることだろう。彼にはまた「散文小詩」一卷五十章があり、原名「パリの憂鬱」、やはり同様に深遠なる作品である。現代散文詩の流行は、実に彼の影響だと言うことができる。

周作人訳になるボードレール詩6篇の冒頭に掲げられた「游子」を、魯迅『野草』「影的告别」と比較してみると、その相似に気付かされる。まず、「私」と「奇異」な「游子」との対話形式となっていることは、「私」と「影」との対話で進行する「影的告别」と同様の構成となっている。また、「何も持たない」「何も愛さない」「游子」が、唯一愛すると告白する「雲」に安らぎを寄託する結末は、「何処にも行きたくない」「何も与えることはできない」とむずかる「影的告别」の「影」が最後に「暗黒」に安らぎを寄託する結末と似ている。細かいところでは、「朋友」、「黄金」などの用語の一致はやはり注目されよう。

そしてここでも最大の鍵となるのは、「散文詩」形式の一致である。魯迅がこの周作人訳ボードレール散文詩に注意を払っていたことは疑いないと考えるが、実は、魯迅の散文詩集『野草』の各篇は、明らかにこの「游子」を含むボードレールの散文詩集『パリの憂鬱』(1855～1869)からその素材、意境、プロットに至るまで多大な影響を受けていた。魯迅は、散文詩集を編むに当たって、世界文学史上、散文詩を文学の一ジャンルとして確立したと評される『パリの憂鬱』を“ごく自然”に、参照利用していたのである(ボードレールと魯迅の関係について先行研究も少なくないが、特に『野草』との関係を中心に、別稿にて検討したい)。

さて、周作人はこのボードレール「散文小詩(六篇)」を記載したわずか6日前1921年11月14日の同じ『晨报副鵬』紙上に、「三個文學家的記念」と題して、フローベール、トルストイと並べてボードレールを論じていた。

ボードレールは(1821年)4月9日の生まれ。彼の十年に及ぶ著作のうち、評論、翻訳以外は、詩集悪の華一卷と、散文小詩および人工の樂園各一卷を数えるのみ。彼の詩には病的な美が充満しており、それはまるで貝の中の真珠のようなものだ。彼は後に出現する頽廢派文人の創始

者で、・・・トルストイは社会主義者の視点から、少しも理解することのできない作家と彼を評した。彼の緑色に染められた頭髪と変態的な性欲について、我々はそれを一種の伝説 (Legend) としか認め得ない、彼が確かに精神病院で亡くなったとしても。我々が完全に認めさらには一種の親近感さえ覚えるのは、彼の「頹廢的」心情とその心情を表現するに足る文章芸術である。(中略) いわゆる現代人の悲哀とは、その猛烈なる生への希求と現在の不如意なる生活のせめぎ合い、つまり“もがき (原文：掙扎)”である。この“掙扎”を表現することは種々の改造主義ともなり得るし、文芸上ではフローベールの芸術主義、あるいはドストエフスキーの人道主義、そしてボードレールの頹廢的「悪魔主義」ともなり得るのである。

(1921年11月11日、于北京。)¹⁸

おそらくは欧米或いは日本辺りの研究書などを参考に書いたのではないかと推測されるが、周作人は翻訳に従事する傍ら自己の著作の中でたびたびボードレールに言及しており、彼の憧憬、敬仰の想いを窺うことができる。ここに、「掙扎」の語が見えていることも興味深い。「掙扎」とは、竹内好がその著『魯迅』(1944)の中で、魯迅の生き様を最もよく表すものとして提起した、魯迅文学を象徴する一語であった。

周作人のボードレール観を探る上で、注目される文章をもう一つだけ引用したい。やはり同じ『晨报副鐫』に、訳詩掲載の四ヶ月後の1922年3月26日に書かれた「沈淪」と題する評論文である。それは、大胆な性の渴望と中国の弱体ぶりへの嘆きを赤裸々に綴った、郁達夫の問題作「沈淪」に対する囂々たる非難に抗して認められたものであったが、この郁達夫擁護の文章の最後にボードレールが登場している。

・ ・最後にあたり、私は真摯に声明したい、『沈淪』は一篇の芸術作品であると。だがそれは“受戒者の文学”(Literature for initiated)であって、一般人の読み物ではない。ボードレールの詩をこう評した者があった：“彼の幻影は暗く恐ろしい。その著作の大部分は若者や無知なる者が読むに適さないが、賢明なる読者はこの詩から稀なる真実の力を得ることだろう。”と。この言葉はまさにこの作品に適用できる。¹⁹

“頹廢的「悪魔主義」”の評語を追認しながらも、周作人がいかにボードレールを高く評価していたか、力強く表明されている。²⁰

それでは、魯迅はどう考えていたのであろうか。彼のボードレールに対する評価は、周作人と対称的に意外なほど冷淡なものである。1920年代前半、散文詩への注目からボードレールが流行した当時においても、魯迅のボードレールへの内容のある言及はほとんど見られない。30年代に入ってから言及が幾つか認められるが、そこには詩人としての積極的な評価や讃辞は皆無で、ただ、革命に失望した文人として、冷たくあしらわれるのである。1930年に書かれた「非革命的急進革命論者」より引用する。

フランスのボードレールは頹廢詩人としてよく知られている。だが、彼は革命を歓迎したのである。革命が自分の頹廢生活を妨げるようになると、こんどは革命を憎悪するようになった。したがって、革命前夜の紙上の革命家、それもとりわけ徹底した、激烈な革命家は、いざ革命にのぞむやそれまでの仮面——意識せざる仮面をかなぐり捨てることありうるのである。²¹

同時期に、ピアズリーの紹介文の中でも、次のように触れられるだけである。魯迅「《比亞茲萊》小引」(1929)より。」

ピアズリーは諷刺家である。彼は Baudelaire のように、ただ地獄を描くことができるだけで、現代の天国の反映を少しも示していない。これは、彼が美を愛したがために、美の墮落が彼につきまとして離れなかったからである。²²

地獄(暗黒)を描くだけで、天国(光明)を示さない、とは、現代中国の文芸評論に頻出する標語を彷彿とさせるが、魯迅のボードレール評価が端的に表現されている。いかに言葉で表された芸術性が高くとも、懶惰と放蕩、頹廢の人生に寂しく散ったボードレールという現れを、魯迅は本質的に好きにはなれなかったのかも知れない。「散文詩」集『野草』の筆を執った魯迅が、ボードレールに注目していたことは間違いないが、少なくとも30年代に至り、文学から革命へと文壇や魯迅自身が舵を切った時には、魯迅はすでにボードレールから心が離れていたことだけは確かなようだ。

ところで、実は興味深いことに、このボードレール「散文小詩(六篇)」、小論で注目する「游子」に続いて周作人が翻訳した第二篇「狗與瓶」については、魯迅の『野草』「狗的駁詰」執筆に関わったとの指摘が、『野草』研究の泰斗、北京大学の孫玉石氏によってすでになされている。だが孫氏は、周作人の訳から三年後、1924年に『語絲』に掲載された張定璜訳「狗和罐子」に依っており、先駆けたる『晨报副刊』上の周作人訳は無視されている(恐らく気付いてもない)。雑誌『語絲』は、ほかでもない魯迅『野草』連載誌であるから、そこに同時期に掲載された張定璜訳「狗和罐子」を魯迅が見ていたことは疑いない。だが、張定璜訳は、5篇の訳詩(うち3篇は周作人がすでに翻訳していたもの)が挙げられるのみで、周作人のような「訳者附記」も見えず、訳者の思想は全く表明されていないし、ボードレールの散文詩に関する文学的考察は全く為されていない。張定璜自身がボードレールを研究した形跡も見当たらない。魯迅に張定璜訳が啓発を与えたとするならば、それは以前『晨报副刊』に掲載された周作人のボードレール訳を想起させるという役割ではなかったか。この問題については、以前、拙論にて少しく論じたことがあるので、参照されたい。²³

ここでは、前節のエスペラントからの散文詩訳に続いて、やはり周作人によって翻訳されたボードレール散文詩が、『野草』「影的告別」の成立に関わっていた可能性を改めて確認しておきたい。このボードレール散文詩「游子」と魯迅『野草』「影的告別」との関係に言及した論考は、管見の限り一切無いようだ。

三

1922年1月8日の『晨报副鐫(附刊)²⁴』に、佐藤春夫「形影問答」が掲載される(周作人訳)。前節で考察したボードレール散文詩が同紙に掲載されたのが、1921年11月20日であったから、その1ヶ月半後ということになる。また、同紙にはちょうど魯迅(署名:巴人)の「阿Q正伝」が連載中であり、1月8日、この佐藤春夫「形影問答」掲載の同じ紙面には、「第五章 生計問題」が掲載されている。

日本 佐藤春夫作 仲密(周作人)譯「形影問答」

「當然是不認識，因為我是從月裡來的人」。那個不認識的，青白的額角的人，對我這樣說。

(中略)

「……是從事於在我的故鄉裡還是沒有的疾病——孤獨與沈悶之研究，這於我是很適宜的一個研究的題目。因此，我便獨自來了。

(中略)

我們在燈台的底下作別了。臨別的時候，他對我這樣說。

「我的朋友呵，我向把我的孤獨與沈悶的研究錄，請你一讀呢。」

(中略)

「怎麼樣，我的朋友。同你約過的我的研究錄，有趣味麼？無聊麼？」不意的從我的後面，發出昨夜那個人的聲音。……

在那里，在坐著的我的後邊，橫在地板和有花樣的牆壁的上邊，映出一個歪斜的蹲著的我的影子。

我想著答道，

「我的朋友呵，……我所要的不是那樣的陳舊的憂鬱。是生活的力！去罷！我的影！」

(後略)

「訳者附記」

佐藤春夫生於一八九一年，是現代日本的一個詩的小説家，所著有「田園之憂鬱」等五種，(中略)法國波特萊耳的散文小詩中有一章「月的恩惠」，(我的譯文收在譯詩及小品集「我的華鬢」中，今年春間想付刊。)可以參看。一九二二年一月五日附記。

佐藤春夫の「形影問答」は、1919(大正8)年4月1日発行『中央公論』第34年第4号に、「寓話二つ」の標題で「薔薇と詩人とのお話」とともに掲載され、その後、単行本『美しき町』(1920年1月18日、天佑社)に「形影問答」単独作品として収録されている。

作品のタイトル「形影問答」が、魯迅「影的告別」を彷彿させることからして極めて印象的だが、その内容、描写が随所できわどく重なり合うことに驚かされる。影を擬人化して、自己を透視させる手法、設定に加えて、影との“別れ”や細部の相似が指摘できる。

従来の魯迅研究において、莊子(寓言篇)の「影問答」や陶淵明「形影神」が『野草』へ影響を及ぼしたという指摘はなされている²⁵。いずれも、影が人と対話するという設定の相似を取り上げたものであるが、作品内容自体の近接はほとんど感じられないので、魯迅の古典への造詣の深さから、「影的告別」執筆に何らかの示唆を与えた可能性を指摘するに止まっている。

佐藤の「形影問答」は、全体の長さから言えば「影的告別」よりもやや長く、散文詩と言うよりは短編小説といった趣きで、その主人公は、文学者としての自己の生活(及びその創作)を、影によって揶揄されるが、青ざめた、いびつな影の形象それこそが自己の現実であることに気付かされるというストーリーである。宇宙人が登場し、SFの要素を取り入れるなど佐藤らしいロマンチックな情調に彩られてはいるが、彼自身(作家として)の孤独や、沈悶といった内奥を解剖した意欲作、佳作と読める。だが実際には、佐藤春夫の作品の中でも著名なものには到底数えられず、少なくとも佐藤春夫研究、日本近代文学研究においても、現在に至るまでこれを取り上げるものは管限の限り認められない。魯迅の『野草』「影的告別」と関連付けられたことも無論いまだかつてない。

小論冒頭に触れたように、この佐藤の「形影問答」が周作人によって『晨报副刊』に掲載された同紙面に魯迅の「阿Q正伝」が掲載されていたことから、魯迅の目に触れていたことは間違いないが、実は、この佐藤の「形影問答」は、更に近いところで魯迅周作人兄弟と結びついていた。『晨

報副刊』掲載の一年あまり後、魯迅周作人共訳の『現代日本小説集』（1923年6月）に、この作品も収録されているのである。そしてそれは、魯迅が『野草』執筆を開始するちょうど一年前のことであつた。周作人の訳になるとは言え、共に『現代日本小説集』の収録作品を詳細に検討していた魯迅の脳裏に、佐藤春夫の「形影問答」が影を留めていただろう可能性は極めて高い。

また、「訳者附記」の中で、周作人が佐藤の作品理解への参考としてボードレールの散文詩を挙げていることについても、前節に見たことと関連して、極めて興味深い点と言えよう。ここで佐藤のことを“詩的小説家”と呼んでいることから、佐藤のこの作品をも散文詩と位置付けていたのかも知れない。そして、魯迅はどう見ていたのだろうか。魯迅（ならびに周作人）と佐藤春夫の関係については、より深い検討が必要と考えるので、それについては別稿に譲りたい。ここでは、1921年に『晨报副刊』に掲載され²⁶、その後1923年に魯迅周作人が協力して編んだ『現代日本小説集』にも収録された佐藤春夫の「形影問答」が、1924年に執筆された魯迅『野草』の「影的告別」と一定の相関関係を有する可能性を改めて確認しておきたい。

さて、ここで改めて整理するならば、各節において『野草』「影的告別」との関連を考察してきた以上三篇（エスペラント、ボードレール、佐藤春夫）の外国作品²⁷は、『野草』執筆直前の1920年代初めにすべてが『晨报副刊』という同じ文芸誌に集中的に翻訳掲載されたものである。そして、その翻訳を担当したのはすべて、魯迅の弟、周作人であつた。

結

一般的に“小品”作家と称される周作人だが、長い文学生涯に一冊のみ、詩集をものしていた。タイトルは『過去的生命』、1919年から21年の創作を中心に30数篇にまとめたもので、1930年に「『苦雨齋小書』の五」として、北新書局から刊行されている。そしてそれはほかでもなく、“散文詩集”であつた。序文に、彼は次のように書き付けている。

「『過去的生命』序」（1929年8月10日筆）

ここに収録した30数篇のものは、私が書いた詩のすべてである。私はそれと呼んで詩となすが、それはこれらの書き方が私の普通の散文とはいささか異なると感じるからだ。中国の新詩はいったいどうあるべきなのか私にはわからないが、わかっているのは私はどうあつても決して詩人ではないということだ。いま“詩”の文字を使うのは借りてきたままで、いわば一種の商売用語に過ぎない。

（中略）

これら“詩”の文句はすべて散文のものであつて、含意もきわめて平凡だ。よつて真正なる詩として遇すれば無論大いなる失望を来すことになる。だがもしもそれを別種の散文小品と見なすなら、その時々感慨を表現することができるはずで、それすなわち過去の生命であり、私の書く普通の散文と何ら変わらないのだ。²⁸

小品、或いは散文作家としての周作人の矜持が見て取れる。彼は自己の文学を“散文（小品）”と位置付け、そこにこそ自分の生命を感じることができた。魯迅が、“雑文”に生きたのと同様に。そして、ふと漏らされた「わかっているのは私はどうあつても決して詩人ではないということだ（我却不知道我無論如何總不是個詩人）」との言葉は、“詩”あるいは“詩人”から終生自己を遠ざけようとした魯迅の態度とピッタリと一致する。翻ってみれば、魯迅にしても、詩集は一冊だけ出版し、それ

が散文詩集（『野草』）であった。兄弟とはかくも似るものであろうか。

最後に、この詩集『過去的生命』より、周作人の詩を一篇引用したい。実はこの詩もやはり『晨报副刊』（1921年9月1日）に掲載されており、タイトルは「夢想者的悲哀」という。

“我的夢太多了。”

外面敲門的聲音，

恰將我從夢中叫醒了。

你這冷酷的聲音，

叫我去黑夜裏遊行麼？

阿，曙光在那裏呢？

我的力真太小了，

我怕要在黑夜裏發了狂呢！

（後略）

一九二一年三月二日病後

誰知れぬ相手に夢から目覚めさせられたこの詩の主人公（周作人）も、「影的告別」の“影”（魯迅）同様に、暗黒と光明のあわいに彷徨する。詩境の相似はすなわち、「お互が相手を影にもつほど本質的に類似している」との竹内好の言葉をはからずも裏打ちしている。

注

- 1 錢理群『周作人論』（1991年、上海人民出版社）、77頁。
- 2 竹内好『魯迅』「伝記に関する疑問」（1944年、日本評論社『魯迅』に収録）。1981年、筑摩書房『竹内好全集 第1巻』、45頁。
- 3 武田泰淳『周作人と日本文藝』方紀生編『周作人先生のこと』（1944年、（東京）光風館刊）、204頁。
- 4 周作人が引く『萬國小文選』は、周作人日記や魯迅日記の書帳、魯迅蔵書、その他中国側資料に見出せていない。そこで、現在の日本で最大のエスペラント団体「財団法人 日本エスペラント協会」（東京都新宿区早稲田町）に赴き、一万冊を超えるエスペラント蔵書の中から、1908年出版の『国際文学選集』など貴重な書物、及びその内容を実際に確認したが、該書並びに周作人の訳した「散文詩二篇」を探し当てることはできなかった。ザメンホフの故郷ポーランドや、エスペラント活動の盛んなオランダなどへ探索の範囲を拡げる必要があるようだ。エスペラント協会事務局長の石野良夫氏には大変お世話になりました。記して感謝を表します。
- 5 “朽腐”の語は、『野草』「題辭」にも繰り返し用いられる。魯迅ら旧世代の人間の“朽腐”が、新世代の生長をもたらすという想いが込められた重要なタームの一つと見なせよう。「我希望這野草的死亡與朽腐，火速到來。要不然，我先就未曾生存，這實在此死亡與朽腐更其不幸。」（1927年7月2日『語絲』週刊第138期）。
- 6 拙稿「魯迅の『野草』執筆と北京『晨报副刊』」（1993年12月、九州大学中国文学会『中国文学論集』第22号、67～84頁）にて、『晨报副刊』上に集中的に現れる『野草』執筆材料について考察し、その中で周作人訳「散文詩二篇」の存在自体にも言及した。
- 7 鈴木徹『バルト三国史』「第一章 被支配民族の歴史」（2000年、東海大学出版会）、1～16頁、

199頁。

- 8 志摩園子『物語 バルト三国の歴史』（2004年、中央公論社【中公新書1758】）、142頁。
- 9 “世界語”との訳語を当てることについて、銭玄同が「駁『惑世界語的一封信』（呂蘊儒編『世界語論文集』【綠葉社叢書之一】、47頁）に次のように述べている。
“玄同が考察するに「世界語」という名詞は、Esperanto の原義によるのではなく、日本にて創出された訳し方であった。十年前に吳稚暉氏、李石曾氏などがフランスで刊行していた『新世紀週報』の中では、「万国新語」と訳している。実際には「世界語」「万国新語」いずれも適当な訳語とは言えず、私たちは便宜的にそれを用いているに過ぎないのだ。”
本書の刊年は不明であるが、呂序に、“世界語紀元三八年十月二日 編於北京”と見えることから（ザメンホフが最初にエスペラントを提唱した1887年を元年とすれば）1924年に当たる。なお、「エスペラント」の原義は「希望する者」である。
- 10 特に断りのない限り、引用文の翻訳は拙訳による。ただし、魯迅の文章の訳については、基本的に学研版『魯迅全集』（1985、学習研究社）を底本として、適宜改訳した。
- 11 魯迅の方は、エスペラント自体を習得するまでには至らなかったようで、「1930年11月23日 至孫用」（『魯迅全集 第12巻』『書信』（2005年、人民文学出版社）、248頁）には、“《文学世界》我恐怕不能帮助，我是不知道世界语的——我只认识 estas 一个字。”と書き付けている。全集原注に、【『《文学世界》』世界语的文学月刊，1922年10月在匈牙利布达佩斯创刊。「estas」世界语：“是”。】とある。
- 12 魯迅（唐俟）「渡河與引路 Esperanto」 1918年11月4日『新青年』第5巻第5号「通信 銭玄同宛」。『集外集』所収。
- 13 周作人「緑洲 十二「世界語讀本」」 1923年5月25日筆。1923年6月5日『晨報副刊』「雜感欄」。『自己的園地』所収。
- 14 魯迅「往復書簡」原文「通訊」1929年7月20日『奔流』月刊第2巻第3期原載。『集外集』所収。逢漢先生：張逢漢、未詳。徐志摩は『小説月報』第14巻第5号（1923年5月）に評論「マンスフィールド」を執筆してその艶麗さを称揚している。
- 15 藤井省三『エロシエンコの都市物語 1920年代 東京・上海・北京』（1989年、みすず書房）など参照。
- 16 周作人『知堂回想録』「一三六 西山養病」（1960年代に執筆。『周作人自編文集』〔2002年、河北教育出版社刊〕、〔下〕461頁）。同じ『知堂回想録』「一三五 在病院中」に次のようにある。【（1921年）六月二日往西山的碧云寺般若堂里养病，至九月廿一日乃下山来回到家里。（医生说是肋膜炎）】。
- 17 『周作人年譜』「1922年2月24日」 2000年、天津人民出版社、196頁。
- 18 周作人（仲密）「三個文學家的記念」 1921年11月14日『晨報副鑄』。『談龍集』所収。
- 19 周作人（仲密）「沈淪」 1922年3月26日『晨報副鑄』。『自己的園地』所収。
- 20 周作人による郁達夫擁護の背景について、尾崎文昭「陳獨秀と別れるに至った周作人——一九二二年非基督教運動の中での衝突を中心に」（1983年10月、『日本中国学会報』第35集）を参照した。
- 21 魯迅「非革命的急進革命論者」（1930年3月1日『萌芽月刊』第一巻第三期原載。『二心集』所収。）参考まで、『魯迅全集』（2005年、人民文学出版社版）に附された、「ボードレール」注を挙げる。「波特萊爾 法國詩人。他曾參加法國1848年的二月革命，編輯《社會生路報》，並參加了6月的街壘戰。但在這次革命失敗後，他喪失了對於社會進步的信心，日益頹廢。所作詩集《惡

- 之華》，描寫病態心理，歌頌死亡，充滿悲觀厭世情緒。」
- 22 魯迅「《比亞茲萊》小引」 1929年4月出版『比亞茲萊畫選』に原載。『集外集拾遺』所収。
 - 23 「魯迅『野草』「狗的駁詰」「立論」の位置とその成立について」 2010年12月、『中国文学評論』第36号 1～18頁。
 - 24 1919年2月に北京『晨報』に開設された新思想、新文芸紹介欄『晨報副刊』は、21年10月12日には名称を『晨報副鐫』と改め独立して発行された（28年6月5日停刊）。ただ、『晨報附刊』と題される時もあるなど誌名表記はやや混乱している。
 - 25 工藤貴正「もう一人の自分、「黒影」の成立（上）」（1995年1月、『学大国文』第38号）、劉增人「植根于深厚的民族文化传统—《野草》芸術溯源之一」（『牡丹江師院学報』1982年第3期）など。
 - 26 『晨報副刊』（1922年1月8日）掲載の、周作人訳「佐藤春夫「形影問答」は、一週間後、上海『民国日報・覚悟』（1922年1月15日）に転載されている。さらに、前掲「游子」を含む周作人訳「ボードレール「散文小詩（六篇）」も、『晨報副刊』（1921年11月20日）から、上海『民国日報・覚悟』（1922年1月9日）に転載されている。『野草』「影的告別」との影響関係が注目される二篇が、同じ新聞副刊に集中して（一週間のうちに）転載されたことを記しておきたい。なお、この上海『民国日報・覚悟』には、1922年9月から10月にかけて「屠格涅夫散文詩集」も転載されている。
 - 27 魯迅「致董永舒」（19330813）に、“此後如要創作，第一須觀察，第二須要看別人的作品，但不可專看一个人的作品，以防被他束縛住，必須博採衆家，取其所長，這才後來能夠獨立。我所取法的，大抵是外國的作家。”とある。
 - 28 周作人自編文集版『澤瀉集 過去的生命』（2001年、河北教育出版社）による。